

A I 以後

変貌するテクノロジーの危機と希望

丸山秀一 NHK取材班 著

本書は、NHKのEテレが2019年に5回にわたり放送した「人間ってナンだ？超A I入門 特別編 世界の知性が語るパラダイム転換」を書籍化したものである。物理学、倫理学、哲学など研究分野の異なる世界的な著名人4人が、毎回、それぞれの知見からA Iが確立した来るべき人類の未来とその対峙法、考え方について語られたものをまとめたものである。

「意識」：A Iはどこまで信頼できるのか

物理学者マックス・デグマーク氏、マサチューセッツ工科大教授。A Iが自立性を持つとどうなるのか。A Iが人類にとって本当に有益なものであるために問われるべき倫理的問題や安全性について対策をまとめた「アシロマA I 23原則」。A I研究のゴールを「方向性を持たない純粋な知性」を作ることから「有益な知性」を作ることへ再定義する必要があるとしている。A Iを超えるA G I (Artificial General Intelligence, 汎用的人工知能)に見られるこれまでの知能、知識集積型のA Iでなく意識(主体的体験)を持つA Iになっていく。さらにA Iの先であるA G Iが実現された社会での人間の役割や経済モデルについて述べている。

「倫理」：A Iに正義は決められるのか

倫理学者ウェンデル・ウォラック氏。かつてアイザック・アシモフの唱えた「ロボット3原則」のように、A I(ロボット、機械)も倫理(道徳)を学ぶ必要がある。人間とA Iの3つの違いは意識、感情、計画と想像であり、ジョン・サールの思考実験「中国語の部屋」を例に挙げている。また、A Iによる自立型システムが確立した場合、間違ったり、事故を起こした

りしたとき、誰が責任を取るのが解決されず、誰も責任を取らないような事態が生じると、人類の廃滅への道を進むかもしれないと指摘している。

「自律」：A Iが「心」を持つと何が起きるのか

哲学者ダニエル・デネット氏。真にA Iが自立性(心、意識)を持つということは、野心を持つこと、隠し事をすることである。私たちは同じ人間同士でさえ、協力や善意を受けるのに苦勞をしている。そこに人間より素早く考えることができ、人間との共通点が少ない自立型A Iが加わったら、ますます面倒になる。また、人間がA Iにはできないことに専念したら、人間はもっと賢くなるだろう。ただし、その代償として、今はできて当然と思っている多くのことができなくなると述べている。

「進化」：A Iで人間は何者になれるのか

著述家、編集者ケヴィン・ケリー氏。イルカやクジラに意識があるけれども、我々人間と違うものであり、理解することは難しい。同様にA Iが持つ意識についても、人間とは異質なものであり、多様なものになり、私たちは多くのA Iの中から選択することになる。様々な型の車やカメラがあるように、様々なA Iが市場で競争するようになる。また、A Iにより新しい五感もたらされ、さらに人間とは異なる「創造性」をすでに持っている指摘している。

終章：「逆転の発想」がもたらす視界

筆者によるまとめ。A Iという新たな知能が我々の認識「意識」に転換を迫っていると述べている。

著者は、NHKエンタープライズ番組開発エグゼクティブ・プロデューサー。

(NHK 出版新書、208頁、880円(税込)) (池守滋)